ケイジの日本語教師奮闘記

おおいし　けいじ（4組）

２００１年のＷＴＯへの加盟により益々、世界経済のトップへの道をひた走る中国。

自動車国内販売台数４３９万台は、アメリカ、日本に次ぎ現在世界第三位。来年には６００万台に達し、日本に並ぶといわれている。

４年後の北京オリンピック、その２年後には上海世界万国博が開かれる。

全世界の脚光を一身に集める中国。その一方では、市場経済の歪とも言うべき都市と農村との貧富の差の拡大。共産党一党支配による政治不信。麻薬の密売、ＳＡＲＳ等の社会問題。サッカーの国際大会に於ける日本パッシングのようなグローバル感覚の欠如など、現代中国の抱える光と影を自分の目で確かめてみたく現地へ飛んだ。

行く前は「中国のどこが、そげん　よかけ？」、

帰ってからは「中国はいけんやったけ？」

と、いかにも広大な中国大陸にふさわしい、漠然とした質問が友人達から飛ぶ。その度に僕は、リハビリ中の麻痺患者のように一瞬コトバにつまった。

・・初めて体験した日本語学校での授業風景が鮮明に頭をよぎる。僕の教室はいつも賑やかだった。

真っ赤なりんご顔の陳姐チャンの大きな声。

「センセーイ、声ガ　ヨク　聞こえマセーンョ！」。

四川省、成都市出身の呉琳さんは、

「センセーイ！浄土ってどういう意味ですか？

ゼンゼンワカリマセーン」。

洞庭湖の近く、岳陽市から来た人気者、王紅軒クンの口癖は、

「キョウノ授業、雑談　イイデスカ？」。

その度に教室中がどっと沸く。

日本語で冗談を言うのが楽しいらしい。だから僕の授業は、日中入り混じりの漫才状態だ。

《日本人が日本語で話をする》それが僕の役目らしく、出来るだけ僕の口からは、中国語が出ない方が望ましいんだという。

「それじゃ中国に会話の勉強しに来た意味がないじゃんか？」

思わずもれる僕のぼやき。

授業の話がも少し続く。もとより僕はにわか教師だから、日本語の文法については、？である。でも生徒がヘンな日本語をしゃべるとすぐに分かる。

しかし、ここで教えている日本語教材をみると、日本人ならごく普通に使っている日本語を２つあげて、「どちらの違い方が正しいですか？」と問う。教師用虎の巻には、文法上の違いが理路整然と書いてあり、それを学生達はしっかり勉強している。

尤も、それを覚えなければ、日本語検定試験に合格しないのだから皆必死なのだ。

大石先生ようこそ！
授業初日は歓迎会で始まりました。

授業風景（ほとんど雑談）
みんなの嬉しそうな顔

いつもは黒板は文字で埋まるのだが、授業始まりのシーンです。

僕の学校。但し、５階だけ。
正式名（長沙市科技進修学院）

金土日の休日は、可愛い生徒達と長沙の街や公園でデート（相互学習）

市民の足は、オンボロバス。一元（１５円）均一。タクシーは五元～。

中国一豪華な長沙駅？午後９時には噴水が上り、オルゴールが鳴る。

学校付近。ヤオリンと言う。歩道がやたら広い。（日本の車道並み）

今日も１人の生徒が質問してきた。

「先生！《学校に行か（ないで、なくて）映画見に行くつもりです。》どっち正しいですか？教えて下さい。」

僕は数回、口の中で反芻しているうちに分からなくなってしまい、

「こんな場合、日本では“学校に行かずに映画にいくつもりです”と言います。」

と、答えてしまった。するとすかさず、

「《行かず》という言葉は書き言葉じゃないんですか？」

と反論してきた。「そんな区別なんか僕が知るかい」、と開き直りたくなったけど、グッとこらえて、

「でも僕らは普通に使いますよ」と、ひきつった笑顔で逃げた。

口の中で模擬会話をしてるうちに自信がなくなってきた。「書き言葉、話し言葉なんて区別、普通しないもんネ」コレ、つぶやき。

いつかもこんな質問があった。

「この時と、あの時とその時の使い分けがよく分かりません」という。「この」は現在で、「あの」は両者が共有した過去というのはわかるけど、《その時》は説明出来なかった。僕の好きな番組、ＮＨＫＴＶ『そのとき歴史が動いた』司会の松平アナの顔が浮かんだり消えたりするのだった。

「中国は方言がうえ（多い）たちごか（のじゃないの）？」も多い質問である。

方言とは別な答えになるが、湖南人は、ラ行とナ行の区別が出来ない人が多い。

「いろいろ」を「いのいの」と言い、「いろいろ」と書く「犬」を「いる」と発音する。

ペットショップの前で趙麗さんが叫んだ！

「アイヤ！センセー、アソコ　イノイノナ　イル　イヌ　ナ」

（わぁー！先生、いろいろな犬がいますね）

本人はマジに（　）の中を発音しているつもりなのでしょうが。

いろいろな場面が頭をよぎる。青海湖の大草原に群れる羊や毛牛を眺めている自分。水平線に沈む真っ赤な太陽を車中からぼんやり眺めている自分。うんざりするほどのお寺をたずね、霊山奇山、名山に登り、河川、湖、滝をめぐる。たった一日限りの数え切れない中国人仲間たちの笑顔が浮かぶ。

それぞれの項目が僕のセルには、あふれんばかりに詰まっている。

「ところで、食事はいけんやった？　中華ばっかいけ？」

やっと出た具体的な質問に、ぼくのセル（頭の中にある思い出の引出しのこと）が開く。

質問者の好奇心を埋めるべく回答を探す。準備しているキーワードの中から《辛い・・とりわけ湖南料理の辛さは中国一》が引き出される。

「昼は近くにある食堂に行って、炒飯かラーメンを食べます。値段は５元〔７０円〕ぐらいかな。」